

## ◇ 松医会のページ ◇



—信州大学医学部同窓会—

## 新しく学内理事に任ぜられて……雑感

例年以上に厳しかった残暑がここ数日の雨でおさまり、ようやく涼しい秋らしくなってきました。寝苦しかった夜ともこれでお別れできそうです。さて、井川靖彦先生が東京大学医学部へ転出された後を受け、8月から新たに松医会学内理事、副会長を仰せつかりました。どうぞよろしく願い申し上げます。古い話で恐縮ですが、私が2000年に大学へ戻った時のことを考えると准教授・講師クラスに私よりも年長の先生方がたくさんおられたように思うのです。それから12年を経過し、井川先生が去られて気がついてみると、私が准教授・講師クラスでは一番の古株になっていました。時の流れが早いことを思い知らされると同時に、各教室の世代交代が確実に進んでいることを実感しています。

大学にいる期間が長くなると、松医会理事会以外にも必然的に医学部や附属病院のさまざまな委員会やワーキングに委員として呼ばれる機会が増えてきます。准講会や科長会の関連で依頼されることが多く、今回あらためて数えてみたところ、私が参加しているものだけで10を軽く超えていました。気安く請け負ってしまったものの、これだけ数が増えてくると他の用事と時間がかぶってしまったなどの理由でなかなか出席できず、他のメンバーの方々に迷惑をかけてしまうこともしばしばです。この8月からは井川先生の後を受けて、新たに「医学部教員削減ワーキング」に参加させていただくことになりました。小泉政権下でまとめられた政府方針に則って、信州大学全体で教員削減が進められていることはご存知の方も多いと思いますが、医学部と附属病院もその例外ではありません。教授、准教授、講師、助教をそれぞれポイントに置き換えて毎年200ポイント強の削減を行うことが大学本部から義務付けられています。これは助教に換算して毎年3名分の枠がなくなっていくことを意味しています。定年やそれに準じた退職者が出た場合に、後任をすぐに決めずに空白を作るなどの工夫で、平成21年度まではなんとかやりくりしてきましたが、細分化された専門

医療の必要性が年々高まっていることや、以前に比べて20%近く学生数が増えている医学教育の現状を考えると、人的資源をこれ以上減らすことはすでに限界にきています。特にもともと定員の少ない基礎医学教室では、これ以上の教官削減はきわめて深刻です。大学から示されている削減案に今後どのように対応するかを検討する目的で、久保医学部長を中心に今年の5月に立ち上げられたのがこのワーキングです。これまでの会合で医学部と附属病院の現状把握が行われ、9月初めにはワーキングのメンバーが学長と直接意見交換して窮状を訴えましたが、大学本部からつい先日示された平成23年度以降の人事案は今までよりもなおいっそうの教官削減を課すたいへん厳しい内容でした。少子化に伴う志望者の減少から入学定員を減らす学部がある中で、臨床・研究・教育と仕事が増える一方の医学部と附属病院も同じ扱いというのはわりきれない気持ちになります。せめて現在のポイント制による教官削減を医学部だけでも凍結していただき、病院に関してはその収益を新たな人材確保に振り向けることができるような仕組みが構築できるよう、久保医学部長や小池病院長を中心に粘り強く交渉していきたいと考えています。

もう一つ、井川先生から引き継いだものに医学教育センター会議があります。毎月1回開催され、医学教育センターの多田教授が中心となって、学生教育に関するさまざまな案件が審議されています。現在の喫緊の課題は学生の質の低下をいかにくいとめるかです。医学部定員数の増加や地域枠の拡大に伴って、以前には見られなかったような学力不足の学生が目立つようになってきました。たしかに私が講義や実習をしていますが、覇気がないばかりか何をきいても答えられない学生が年々増えてきている印象で、最初はOSCEなどの教科が増えて勉強が追いつかないせいかと思いましたが、事態はもっと深刻のようです。このままでは医師国家試験合格率が低下することさえ強く危惧されており、各学年末に行われる総合試験を厳格化するなどのさまざまな方策が検討されています。医学生への質の低下は信州大学だけにとどまらず地方大学全体の問題となっています。現在の民主党政権は近々に医学部新設に向けて本格的な検討を始めるようですが、粗悪な医師を今以上に大量生産して世の中に送り出すことがほんとうに正しい選択なのか、最初から結論ありきではなく大学関係者を含めた識者の意見もきいて十分に議論していただきたいと思います。

(文責 松医会副会長・学内理事

脳神経内科, リウマチ・膠原病内科 松田正之)